

稲作情報 No.7

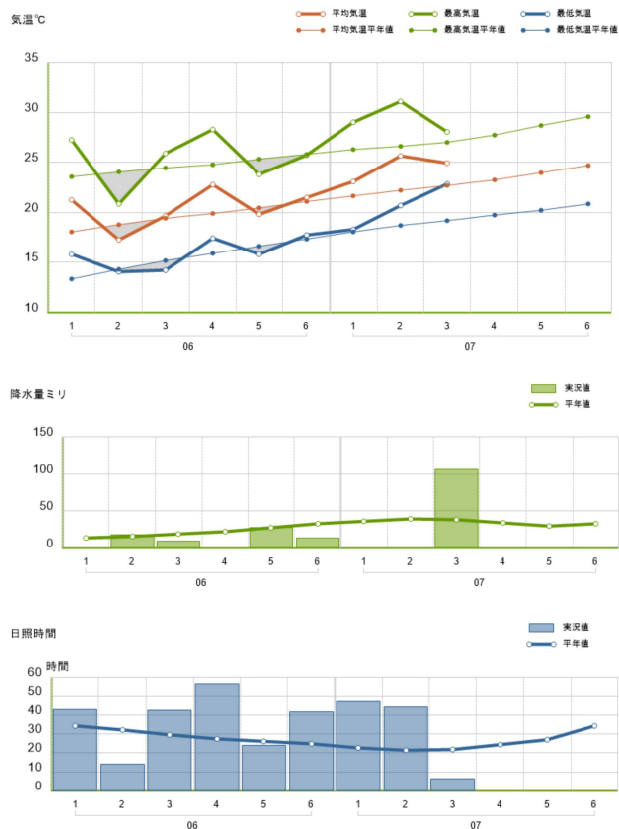
発行日: 令和8年7月16日
発行: 仙北地域振興局農林部農業振興普及課

～生育は早い！適切な水管理を！～

1 気象経過と今後の気象予報

これまでの気象経過(アメダス大曲)

図1 半旬ごとの気象経過(秋田県農業気象システムより引用)



向こう1か月の気象予報(7/18～8/17)

- ・仙台管区气象台より令和8年7月16日に発表された1か月予報によると、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
- ・平均気温は高い確率が60%で、週別の気温は1週目(7/18～7/24)は高い確率が80%、2週目(7/25～7/31)は高い確率が70%、3～4週目(8/1～8/14)は高い確率が50%です。
- ・降水量はほぼ平年並の見込みです。

図2 東北地方 1か月予報(出典: 気象庁HP)

気温、降水量、日照時間の各周回の確率 (%)		向こう1か月 07/18～08/17	1週目 07/18～07/24	2週目 07/25～07/31	3～4週目 08/01～08/14
気温	東北日本海側	10 30 60	10 15 80	10 20 70	20 30 50
	東北太平洋側	10 30 60	10 15 80	10 20 70	20 30 50
	東北日本海側	10 30 60	10 15 80	10 20 70	20 30 50
	東北太平洋側	10 30 60	10 15 80	10 20 70	20 30 50
降水量	東北日本海側	30 30 40	30 30 40	30 30 40	30 30 40
	東北太平洋側	30 30 40	30 30 40	30 30 40	30 30 40
日照時間	東北日本海側	40 30 30	40 30 30	40 30 30	40 30 30
	東北太平洋側	30 40 30	30 40 30	30 40 30	30 40 30

2 生育概況(7月15日水稻定点調査結果より)

7月15日の定点調査結果(あきたこまち、10地点平均)は、草丈は62.9cm(平年比97%)でやや短く、茎数は548本/㎡(平年比109%)で多くなりました。また、葉数は11.8葉(平年差+0.7葉)で多く、葉色(SPAD値)は41.0(平年比97%)でやや淡くなりました。

7月以降も気温が高く経過したことから、生育は早まっています。多くの地点で幼穂形成期を過ぎていることから、中干しは終了し、間断かん水に切り換えましょう。

3 当面の技術対策

1. 今後の水管理

(1) 中干しは幼穂形成期までに終了

- 幼穂形成期を過ぎているほ場が多いことから、この後の水管理は間断かん水に切り替えます。中干し開始が遅れたことで中干しが十分に実施できなかったほ場では、落水期間をやや長めにした間断かん水により、徐々に田面を固くすることで地耐力を高めます。
- また、中干し後の急激な湛水管理は根を傷めるため、間断かん水を行いながら土壌へ水分と酸素を交互に供給します。
- 減数分裂期から穂ばらみ期にかけて平均気温20℃以下(最低気温17℃以下)の低温が予想される場合は冷害の危険性が増すため、幼穂形成期に入ったら水深10cm以上の深水管理(前歴深水管理)を10日間程度実施します。

(2) 本年も高温の予想！高温障害を回避させる対策を徹底しましょう

- 出穂後10日間は湛水管理(水深5～6cm程度)とし、その後は間断かん水を基本とします。本年も高温が予想されていることから、根の機能減退を防止するため、水の入れ替えにより地温の低下を図ります。ため池や沢水利用の地域等で農業用水の不足が懸念される場合は、事前に地域内で用水の利用計画などを調整しながら、落水期間の短い間断かん水やかん水を日中に行うなど、高温時の水分供給と地温の低下に努めましょう。
- フェーン現象等で乾燥した風の強い日は、湛水管理を行い、蒸散による水分の消耗を軽減します。
- 早期に落水すると葉色の低下や枯れ上がり、根の機能減退につながるため、落水時期は出穂後30日以降とします。

(3) カドミウム汚染米対策を徹底しましょう

カドミウム汚染米が発生する恐れがある地域で、「あきたこまちR」以外の品種ではこれまでと同様に7月中旬～8月下旬(出穂期が8月2日の場合:7月12日～8月23日頃)までの出穂前3週間、出穂後3週間の計6週間は、湛水管理を必ず実施しましょう。

※出穂期:ほ場全体の40～50%が出穂した日

詳細については、美の国秋田ネットに掲載のカドミウム汚染米生産防止対策リーフレットを参照してください。

HPアドレス: <https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/90269>



2. あきたこまちの栄養診断(追肥の判断)について

(1) 幼穂形成期における栄養診断と追肥の判定(品種:あきたこまち)

7月15日の定点調査では、草丈は平年よりやや短く、茎数は多く、葉色はやや淡くなりました。また、全ほ場が幼穂形成期を過ぎており、各ほ場の幼穂形成期における栄養診断では、IVまたはV-2型が多かったと推測されます(図3)。

今後も高温傾向が続く予報であることから、地力の低いほ場等では葉色の低下に注意が必要です。幼穂形成期には栄養診断を実施して追肥の量と時期を判断しましょう。

減数分裂期に追肥する場合は、葉耳間長±0cm(出穂12日前頃)までに、窒素成分で1～2kg/10a行います。減数分裂期を過ぎてからの追肥は食味が低下するので、遅れないように追肥しましょう。生育過剰の場合(VI型)は倒伏軽減剤の使用を検討してください。

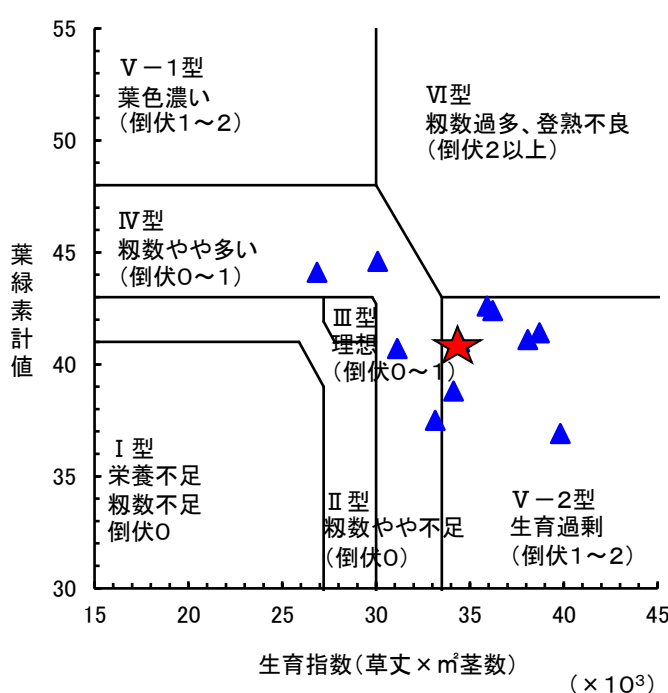


図3 幼穂形成期における栄養診断(県南)

生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2kg	2kg
II型	2kg	2kg
III型	ムラ直し1kg	2kg
IV型	なし	2kg
V-1型	なし	ムラ直し1kg
V-2型	なし	ムラ直し1kg
VI型	なし	なし

注)目標収量 570kg/10a、あきたこまち

※幼穂形成期に葉色が濃く、草丈が64cmを超える場合は倒伏の危険性が高くなるので、追肥は控えましょう。

※基肥に緩効性肥料や有機質肥料を使用している場合は、ほ場の状況に合わせて追肥の有無、追肥量を判断してください。

※★印は管内の平均値

表1 幼穂形成期(7月15日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(県南地区:稲作指導指針)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m²)	葉数 (葉)	葉緑素計値 (SPAD502)	生育指数 ($\times 10^3$)	栄養診断値 ($\times 10^5$)
理想値	62	463	10.9	42	28.7	12.1
上限値	64	484	11.0	43	30.0	12.8
下限値	60	443	10.7	41	27.2	11.4

表2 減数分裂期(7月25日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(県南地区:稲作指導指針)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m²)	葉数 (葉)	葉緑素計値 (SPAD502)	生育指数 ($\times 10^3$)	栄養診断値 ($\times 10^5$)
理想値	74	437	12.3	38	32.3	12.3
上限値	75	454	12.5	39	33.5	13.0
下限値	72	420	12.1	37	30.8	11.7

3. 葉いもちの発生に注意！

ほ場巡回により発病状況を確認し、病斑を発見した場合は、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤またはノンブラス剤）の茎葉散布を行います。

また、葉いもちが多発した場合は、穂いもち防除として出穂15～7日前にコラトップ剤またはゴウケツ粒剤（サンブラス粒剤）のいずれかを散布するか、出穂直前にトライフロアブルかビーム剤と穂揃期にトライフロアブルかラブサイド剤で茎葉散布を行います。さらに必要に応じて、傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行います。

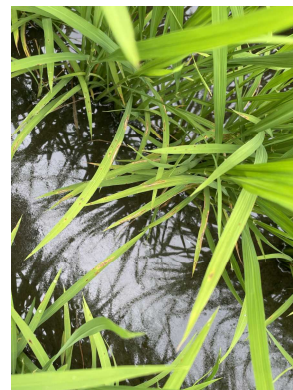


写真 葉いもち病斑

4. 斑点米カメムシ類の繁殖を抑える雑草管理

向こう1か月の気象予報では気温が高く経過する予報であることから、斑点米カメムシ類の多発に注意が必要です。

斑点米カメムシ類の繁殖を抑えるため、**草刈りは出穂の15～10日前までに**、畦畔だけでなく休耕田や水田周辺雑草地等の繁殖地を対象に、できるだけ地域で一斉に行いましょう。

その後の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に実施します。

5. 猛暑が続きます。熱中症対策を徹底しましょう！

7月に入り、気温が高い日が続いています。同じ気温でも湿度の高い日の方が熱中症になりやすいとされていますので、こまめな水分・塩分補給を心がけ、熱中症を予防しましょう。

また、作業の際は単独作業は避けて、できるだけ複数名で作業を行いましょう。

時間を決めて連絡をとったり、休憩を取るなどしてお互いの体調を確認しましょう。

熱中症が疑われる場合は、速やかに作業を中断し、涼しい場所に避難するなどの応急処置をとってください。症状が改善しない場合は、医療機関を受診しましょう。

6. 農薬の飛散、危害防止に注意しましょう

- ①農薬を散布する場合は、周辺の住宅地や農作物に配慮し、事前に近隣住民等に知らせるようしましょう。
- ②農薬は、風がないまたは弱い時に散布しましょう。散布中に風が強くなった場合は、直ちに散布を中止しましょう。
- ③散布位置や散布の方向に、他の農作物等が無いことを確認し、散布の際は適正なノズルと圧力で行いましょう。
- ④養蜂が行われている地区で殺虫剤を散布する際は、養蜂業者等と連携をとり、できるだけ早朝や夕方に散布するなど、ミツバチへの危害防止を徹底しましょう。
- ⑤その日のうちに農薬散布の内容を記録しましょう。